化学合成農薬に頼らない総合防除技術（野菜）

＜品目＞

・トマト

平成27年2月

山形県農林水産部農業技術環境課

化学合成農薬に頼らない総合防除技術（ トマト ）

（実践している項目のチェック欄に〇を付ける）

No.	総合防除技術	技術ポイント	チェック欄
1	健全種子の確保	病害の発生を予防するため、消毒されている種子を使用する。または消毒されていない種子は種子消毒を行う。	
2	適正品種の選定	萎凋病や青枯病、葉かび病等の発生が懸念されるほ場では、病害に対する抵抗性品種もしくは抵抗性台木を使用する。	
3	健全苗の育成	育苗には、病原菌や線虫に汚染されていない培土や資材を用いる。苗を購入する場合は健全苗を確保する。	
4		育苗中に病害虫の発生が見られたら、早期に防除する。発病株は早期に抜き取り、適切に処分し、健全苗のみを定植する。	
5		適正な播種量、施肥量を守り、育苗中は過度な灌水を避けるなど高温多湿にならないようにする。	
6		育苗施設への害虫侵入を抑制するため、紫外線除去フィルムによる被覆や施設開口部のネット被覆等の物理的防除手段を講じる。	
7	ほ場の選択と改善	栽培に適した水はけの良いほ場を選択する。排水の悪いほ場に作付けする場合は、高畝とするなど対策を講じる。	
8	ほ場周辺の雑草管理	ほ場への雑草種子の持ち込みや雑草を発生源とする害虫の飛び込みを抑制するため、施設周辺の雑草防除に努める。	
9	土壌消毒	土壌病害や線虫の発生が懸念されるほ場においては、植付け前に太陽熱消毒や薬剤による土壌消毒を実施する。	
10	作物の栽培管理	必要に応じて土壌診断を受け、診断結果に基づき適切な施肥を行い、過剰施肥を避ける。	
11		土壌pHを測定し、pHが低い場合には石灰質資材を施用して土壌pHを矯正する。	
12		植付けまでに雑草が発生した場合は、雑草の種子結実前に除草を行う。	
13		雑草抑制のため、マルチ等により、畝面、通路等を被覆する。利用可能であれば生分解性マルチ、再生紙マルチなどを利用する。	
14		品種に応じた適正な栽植密度で定植する。	
15		品種や作型、生育に応じた適正な摘葉・整枝を行う。	
16		施設内が高温・多湿にならないように適正な灌水と適切な換気を行う。	
17		花粉交配用ミツバチ等の受粉昆虫を利用する。	
18	施設内への害虫侵入防止措置	害虫の発生密度抑制を図るため、交信かく乱剤（性フェロモン剤）を設置する。	
19		害虫の侵入防止を図るため、栽培施設を紫外線除去フィルムで被覆する。	
20		害虫の侵入防止を図るため、施設の出入り口や側面に防虫ネットを展張する。	
21		飛来性害虫を捕殺するため、粘着トラップを設置する。	

化学合成農薬に頼らない総合防除技術（ トマト ）

（実践している項目のチェック欄に〇を付ける）

No.	総合防除技術	技術ポイント	チェック欄
22	病害虫発生予察情報等の確認	病害虫防除所が発表する発生予察情報を入手し、確認する。	
23	病害虫防除の要否の判断	施設内を見回り、病害虫の発生や被害を把握するとともに、気象予報等を考慮して防除の要否を判断する。	
24		前作や近隣の作物、施設周辺における病害虫の発生状況を確認し、病害虫の発生を予測する。	
25		粘着トラップ等を設置し、害虫の発生動向を把握することで防除の要否、防除時期を判断する。	
26	生物農薬の利用	適用のある害虫に対して、天敵昆虫を使用する。	
27		適用のある病害虫に対して、微生物農薬を使用する。	
28	農薬の使用全般	十分な薬効が得られる範囲で最小の使用量となる最適な散布方法を検討した上で使用量・散布方法を決定する。	
29		農薬散布に当たっては、ドリフト低減ノズル等の飛散を少なくする散布器具を使用するなど適切な飛散防止策を講じる。	
30		農薬を使用する場合には、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、当該地域で薬剤抵抗性や耐性菌が確認されている農薬は使用しない。	
31		散布器具、タンク等の洗浄を十分行い、残液やタンクの洗浄水は適切に処理し、河川等に流入しないようにする。	
32	ほ場の衛生管理	罹病葉や果実、摘葉した葉等は施設周辺に放置せず、土壌中に埋める等適切に処分する。ウイルス病、細菌病等、回復困難な病害の発病株は、発見次第、早急に抜き取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。	
33		ウイルス病や細菌病の発生が懸念される場合には、発生を助長しないように器具、手の洗浄等の衛生管理を行う。	
34	収穫後残さの処理	収穫後残さは病害虫の発生・伝染源となるため、早期に適切に処分する。	
35	作業日誌の記帳	各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等の栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。	
36	研修会等への参加	化学合成農薬に頼らない防除技術等の研修会に積極的に参加する。	
合計数（36項目中〇が付いた数）			